

大関・御嶽海久司君の益々の活躍を期待してエールを送る！  
—新開キャンパスで御嶽海久司君に「やまじい」と呼ばれた思い出—

資料館スタッフ 山口 登

研究紀要にこんなタイトルで一文を掲載するのはいかなものかという思いはあるが、木曾山林資料館のある新開キャンパスでの御嶽海久司君の思い出である。

御嶽海関は高校生時代にこの木曾山林資料館がある木曾青峰高校新開キャンパスで高校1年生の時を過ごし、別の校舎に移った2・3年時も演習林実習のたびにスクールバスで来て、ここで作業服にヘルメットを被って、唐鍬（鍬の一種で、開墾や根切りに使う）やチェーンソー（立木の伐採や丸太の切断に使う）を持って、演習林でこれらの山道具を使用した実習に取り組んだ。

そして何よりも所属していた相撲部の毎日の練習は、この新開キャンパスにある旧木曾山林高校時代からの室内練習場の土俵を使っていたのだから、彼には忘れられない思い出の地なのだ。

久司君が木曾青峰高校森林環境科に入学した平成20年(2008)に、ちょうど私は非常勤講師として勤務することになり、同期生ということになる。彼が3年のときに「環境マネジメント」という難解な科目と「アウトドア」の科目を担当した。「アウトドア」は、学校の設定科目で久司君を含む5名が選択し、当時の彼は私を「やまじい」と呼び、私は彼を「久司」と呼んでいた。たまたま彼の本名である大道おおみちをダイドウと名乗る同級生がもう1人いたので、混乱を避けるため同級生は皆「ひさし」と呼んでいたというわけである。

「アウトドア」という科目は、林業や登山・キャンプなどの野外活動に役立つようなさまざまな技術を楽しみながら習得しようという科目で、現在はもう開講していないが、当時は自然観察・地図の見方・ロープワーク・木登り・野外での火のおこし方とアウトドアクッキング・イワナ釣り・ツリーデッキの製作・輪かんじき（雪の上の歩行で足の埋没を防ぐために用いる木製輪状のもの）の製作とそれを使っての雪中自然観察等々、毎週ユニークなテーマを用意したので、久司君は仲間たちと野外学習を楽しんでいた。

高校生時代の大道久司君はどんな生徒だったかというと、体重はすでに125kgあったけれどバトミントンなど軽やかな身のこなしをしていた。彼の専攻した森林環境科は林業系の学科なので、「ぶり縄」を使った木登りの実習をすることもあった。ぶり縄は、ロープの両端に長さ60cmくらいの堅くて太さが4~5cmの棒をくくりつけた簡単な道具であるが、彼はあの巨体でぶり縄をあやつって見事に木に登ることができたのである（図参照）。

なお、ぶり縄は日本の伝統的な木登り道具で、ロープ（縄）と2本の棒（ブ

リ木)とによって足場を作りながら、太くて高い木に登る特殊なワザとして知られ、このぶり縄のワザは、You Tube で実際の映像を見ることが出来る。

軽やかな身のこなしの彼も演習林実習で山の傾斜地を登るときは、一番最後から「ハァーハァー」言いながらゆっくりと登ってくる。彼がやっと目的地に着くと、先に到着していた仲間たちが早々に作業に取りかかるので、彼は休憩なしになってしまうというのがいつものことであった。ただ帰りは下りだから真っ先に背中を丸めてクマが転がっていくように降りていった。

この大相撲3月場所。落ちついて、揺るぎない自信を内に秘めた顔つきで土俵を努めている御嶽海関を見ていると、無邪気に火おこしをして昼間から焼き肉をほおぼっていた久司君を思い出して、おもわずニヤリとしてしまう。

あれから11年、彼はいろいろな人と出会い、影響を受け、悔しい思いもたくさん味わって、とうとう日本相撲協会の顔と言わなければならない大関の地位にまで昇った。あとは横綱という最終目標をめざすのみとなった。

力士という稼業はその過酷さ故にトップとして活躍できる期間は短い、これからの10年弱の現役力士としての毎日を、怪我をしないように気をつけつつ、精一杯の力を出し切り、そして相撲を楽しんでほしいと願っている。

木曾谷で同じ林業を学んだ木曾山林高校・木曾青峰高校OBや在校生、そして木曾郡のすべての人々が、大声援を送っているぞ！

木曾山林資料館でも、ささやかながら「御嶽海コーナー」を設け、のぼり旗や優勝時の写真、毎場所ごとの番付表、優勝を報じている新聞記事等を展示して来館者に楽しんでもらっている。



御嶽海が高校の3年間、毎日練習に励んだ土俵今年1月に取り壊しになった。

同様に校舎の取り壊しも進んでいる。

(木曾山林資料館より校門方向を見る)

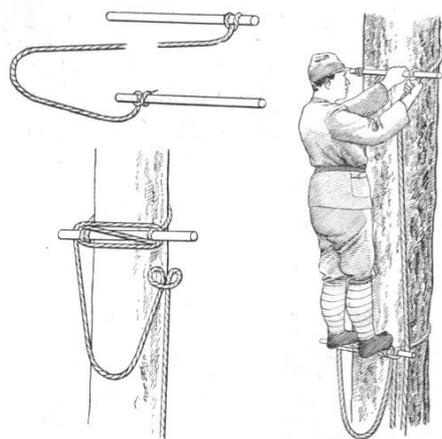


図 ぶり縄 (伐木運材図説より)

